



Title	<書評>「Industrial Design heute Umwelt aus der Fabrik」 Von Wilhelm Braun-Feldweg ROWOHT Hamburg 1966
Author(s)	飯田, 良祐; 羽生, 正氣
Citation	デザイン理論. 1967, 6, p. 109-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52488
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

「Industrial Design heute
Umwelt aus der Fabrik」

Von

Wilhelm Braun-Feldweg

ROWOHT Hamburg 1966

この書物はタイトルも示しているように、今日のインダストリアルデザインの全般にわたり、西ドイツの現役デザイナーであるヴィルヘルム・ブラウンフェルトウェークが、その見解を表明したものである。彼は、こゝ十年程の間に世界は大いに変わって来たとし、特にデザインについてはそれが単に「流行語」であった時代から、現在では既に「使い古されたコイン」のように生活に定着したと考え、このことが彼をこの書物の執筆へと踏み切らせた。一般にデザイナーのデザイン論ということで、その客觀性が懸念されがちだが、この書物に関する限りそれは杞憂と判断してよいようである。というのは、まず彼の視野の広さと深さであるが、それは数多くの引用に見られ、例えばオルテガ・イ・ガゼットやヘンリー・ミラー、S・メルヒンガー等にまで及んでいる。又、例えばアメリカ資本主義攻勢や、ポップアートやシュールレアリズム等の現象に対する判断も積極的で且つ鋭く、リアリストぶりがうかがえるばかりでなく、そこにまでインダストリアル・デザインの在り場所を拡げているのは卓見である。このように豊かな教養とデザイナー特有の現実的な眼とを兼ね備えている著者の論述には、高い見識と真実を求める強い意志が読み取れ、本場デザインの伝統の重みを感じさせる。著者はこの仕事の困難さを指摘しながらも、もし「三角測量のように一点一点を確実にたどり、辛棒強く照準線を探し求めるなら、デザインの在り場所が外側から規定され、そこから指標が生まれる」もの

と確信している。そこで著者は、その内容を自分でコツコツ調査考察したものに限り、又過去の偉大な個人の信条を歪曲するのをおそれてその構成には注意深い配慮を施している。

第1章『前工業時代の形態学へ』では、機械時代の初期の混乱から手工芸が改めて見なおされたことからそれについて考察し、結局近代の開かれた世界は「存在とその条件との根本的変化」によって前時代とは明確に区別されねばならず、従って「手工芸は決して世界の全快治癒をもたらさない」としている。

第2章『過去の復活・探究』では、デザイン運動の歴史をかなり細かく辿っているが、機械の是非をめぐってD・W・Bやバウハウスを重視しており、更にデ・スタイルやロシアについても論及している。ここでは、マイヤーやムツヘに対する傾倒が見られ、ロシアについても構成主義より絶対主義に多くの言を費やしているのが目立っている。

第3章『運命としての工業』では、「機械工業は時代の必然であり」芸術作品の「永続性を否定」して「工学技術の制約」を重視する。そしてそこから規準概念が重要となるとし、第4章『生産規準と個人の要求』ではそれにつき種々の面からかなり綿密に考察している。

第5章『今日のデザイン』では、デザインがインターナショナルな性格をもつとしながらも、世界各国の状況を述べつつ工業発展の相異以上の個有なもののが在るとして指摘している。著者は「デザイナーは関係各専門分野の支点にあって夫々に対してディレクタントであるべきだ」とする世界的傾向を、オリヴァッティ、IBM、ブラウンの成功例とともに是認しつつも、そのような局外立場的デザイナーが「知的綜合のみにたよって構成すること」に満足していない。

第6章『可能なそして既に明白な古典』では、作品のより高い利用価値を追求する目的で、デザイナーが機能や技術上の制約から形態を与えて行く場合に生じてくる疑問を提出し、シュールレアリズムの作家の反論によって、その問題点が浮彫りされている。そして、工業生産における形態は、工作連盟のテーマを乗り超えて新しい質としての「Eleganz」を賦与される必要があることを

指摘し、著者はそれを具体的にデザイナーの作品、意見を検討することによって説得を試みている。

第7章『複雑なデザイン—その将来の課題』では、前章までの考察をふまえて、ヨーロッパの特殊事情としての手工芸の問題をあげながら、工業技術が必然的に課するデザイン形成上の諸問題を、将来の課題として提起している。手工芸と工業生産の差異が形態追求の過程で如何に現われるか。さらにオートメーションの下では、既に19世紀的な機械に対する楽観的態度では存立し得ない形態形成上の問題を鋭く指摘している。

第8章『論争と証言』では、ヴェルデから始めて、作家達の文章が抜粋収録され、最後に著者の短い論文で終っている。巻末には19世紀以後の工業とデザインの対照年表が添えられ、又参照文献も豊富であり、両方とも便利である。

以上のように、この書物は、デザインを工業と関係づけつつ、その存在場所を規定しようとしており、特にその厳密な現実に対する態度は勝れている。最近のヨーロッパの見解を知るのに極めて恰好である。

京都工芸繊維大学大学院修士課程 飯田良祐・羽生正氣

仏国
カンソン社製品

カンソン木炭紙.....¥ 45. —
アングル木炭紙.....¥ 25. —
カンソン色水彩紙.....¥110. —
スケッチブック
カンソン淡彩紙(白)入 ¥550. —
グレイン紙入#8F大 ¥450. —
●ベルギーブロックス油絵具

洋画材料

額 樣
製 図 器



画
美
堂

京都・下京区河原町通五条上ル TEL(35)0875